

Scramble Shot

当することになる。2009年にヴォルフガング・リームに委嘱した《プロセルピナ》で、ドイツのオペラ専門誌「オーパンヴェルト」の年間最優秀世界初演賞を獲得したオペラ部門の芸術監督ジョルジュ・テルノンは、最後の年もバロックオペラと新作オペラ《昏睡》で有終の美を飾る。

1652年の初演から340年ほどの間、忘れ去られていたカヴァッリのオペラ《ヴェレモンダ、アラゴンの女傑》を観た（5月1日所見）。1753年に建てられた小さなロココ劇場の舞台中央には水の張ってある溝を設置し、その水をふんだんに使いながら歌うのはさぞ難しいだろうと想像する。しかし歌手陣のレヴェルの高さには驚かされた。題名役のアイランド人ソプラノ、ネッタ・オールを筆頭に、テリオを歌ったアメリカ人カウンターテナーのローレンス・ザッツォ、ゼレミーナ役のアレクサンドラ・サムイリドゥ、ロランド役のシュテファン・セヴェニヒらがハイレベルな歌唱で支えていた。18～19世紀の音楽に精通している古楽オーケストラ、コンチェルト・ケルンは、バロック音楽研究でも名を馳せているアルゼンチン人のガブリエル・ガッリードの指揮で、ところどころ破綻をきたすも雄弁な音楽を奏でていた。世界の歌劇場の定番になるには難しいかもしれない作品だが、長い年月を経て再演されたという事実は意義深いと言えよう。（中東生）



シュヴェツィンゲン音楽祭の《ヴェレモンダ、アラゴンの女傑》から ©Martina Pipprich

Festival シュヴェツィンゲン音楽祭

かつてモーツァルトも御前演奏したプファルツ選帝候の夏季離宮でSWR（南西ドイツ放送）が主催するこの音楽祭は、来年から現ザルツブルク・ビエンナーレ芸術監督であるハイケ・ホフマンがコンサート部門とオペラ部門の両方を担